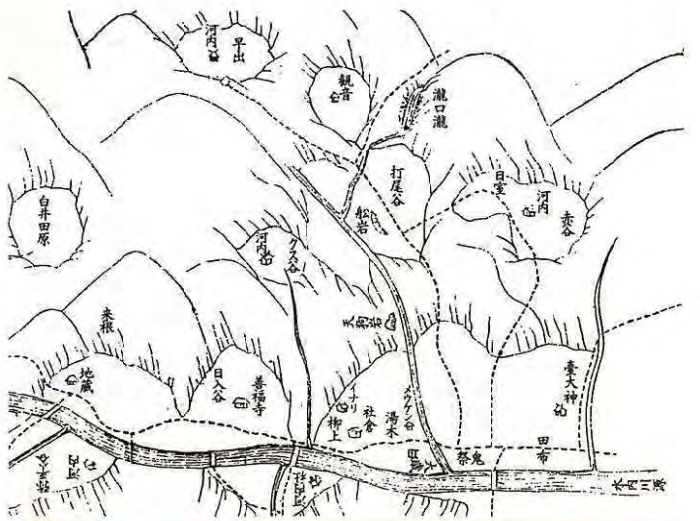


広島藩のお抱え絵師
岡岷山の描いた江戸時代の湯来から打尾谷を歩く

今から二百年あまり前の江戸時代のことです。一七九七年の閏八月(新暦では十月中旬)、安藝の国、広島藩のおかえ絵師、岡岷山(おかみんさん)は藩主浅野重晟(しげあきら)公の許可を得て、都志見(つしみ)の駒が瀧まで写生の旅をおこないました。旅の後で提出したのが、旅の記録「都志見往来日記」と風景画「都志見往来書諸勝図」です。原爆の難をのがれて現在も広島市中央図書館に保管してあります。岷山は、駒ヶ瀧だけでなく途中の風景、特に湯来地区の風景を写生することを目的としたようで、湯来地区だけで一五枚の絵を描いています。藩主重晟公が尊敬する祖父の吉長(よしなが)公が整備した湯の山温泉があったからでしょうか。岷山は湯の山を出発したあと石ヶ谷峽に立ち寄り湯来で昼食をとりました。その後、打尾谷を越えて猪股峠を越えて、筒賀に入り上筒賀で宿泊しています。岷山によると、多田村温泉(湯来温泉)には、目隠しがあるだけで屋根は無かったようです。今と同じように浴槽が二つあって石垣から湯が出ていました。湯来温泉は、サギが傷を癒していることから発見されたといひ伝えられています。さあ、岷山とともに湯来温泉から打尾谷まで歩いてみましょう。



「藝藩通史」(二八二五)
岡岷山の「都志見往来日記」から二十八年後に完成した地誌です。広島藩の村々の当時の状況を伝えてくれます。この中にある多田村の地図のうち東半分を掲載しました。原図の文字は毛筆の崩し字なので読みやすいよう活字になおしてあります。地図には湯来を「湯木」と表記しています。また、打尾谷川も大歳神社の北側を流れていました。岷山が描いた天狗岩や船岩が記入されています。日記に観音堂と書いた刈屋観音の記入もあります。日室、赤谷、早出、楠谷、白井などは廃村になりました。

「江戸ゆきツアー」のコース

「江戸ゆきツアー」では、岡岷山がたどった行程を五つに分けて、それぞれ半日のコースとして設定しています。二時間の短縮コースもあるので、スケジュールや体力に応じて選択してください。



「発行・お問い合わせ」
「江戸時代から残る、湯来地区の古道を歩いてみようプロジェクト」
NPO法人湯来観光地域づくり公社
広島市佐伯区湯来町大字多田2545
TEL 0829-85-0670
HP: <http://e-yuki.net> 「となりの里山」

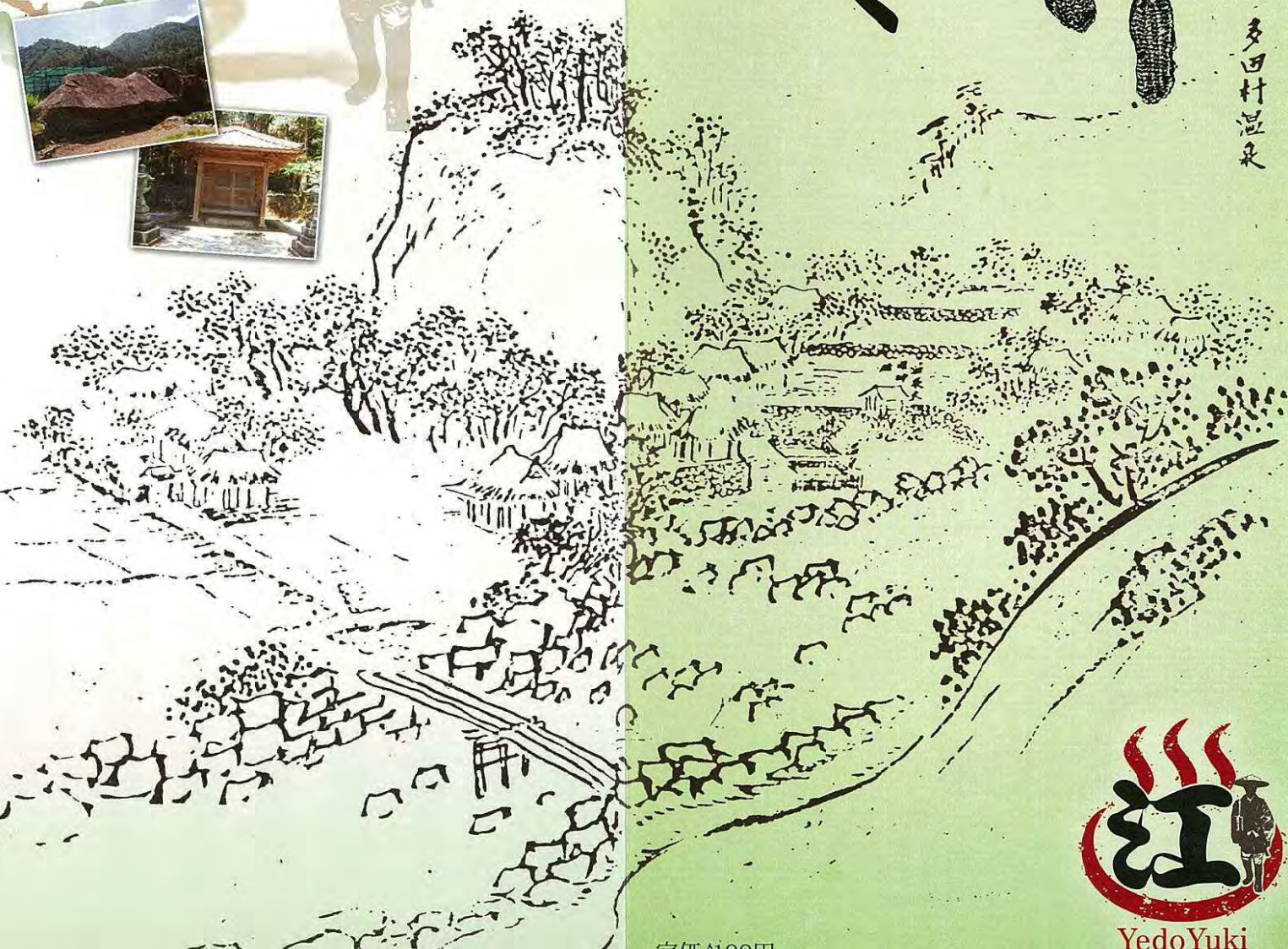
湯来・船岩コース編

江戸の湯来を歩く



「江戸の湯来を歩く」
江戸時代から残る、湯来地区の古道を歩いてみよう

湯来地区には、広い自動車道路はありませんが、あちこちに小道が残っていて、のんびり歩くことができます。このような小道をテクテク歩いてみると、これらの小道の歴史を知りたくなりました。そんないきさつから、私たちは、江戸時代からあった古道を復元する作業をはじめました。そのために使った資料は、「芸藩通志」(1825)の絵図や、藩主浅野家の御抱え絵師、岡岷山の「都志見往来日記」と「都志見往来諸勝図」(1797)、古老からの聞き取りなどです。こうして判明した江戸時代の街道について、みなさんに楽しく歩いていただけるルートを選んで、パンフレットを作成することにしました。湯来船岩コースは第三弾で、これからも続版を作っていく予定です。さあ、このパンフレットを片手に、江戸時代からの歴史がある、湯来地区の古道をのんびり歩いてみて下さい。



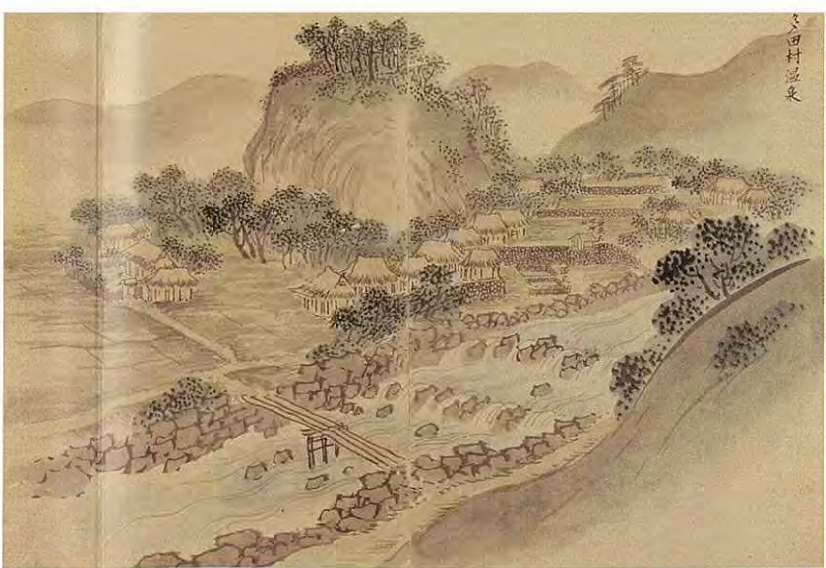
定価/100円



「都志見往来日記」船岩



「都志見往来日記」天狗岩



「都志見往来日記」多田村温泉
岡 岷山「都志見往来日記・同諸勝図」より 広島市立中央図書館 所蔵

江戸の湯来を歩く

湯来・船岩コース 半日・2時間コース

湯来から打尾谷まで溪流沿いの道は、道幅も狭く歩道もないので通る車に注意して歩きましょう。
湯来交流体験センター駐車場に公衆トイレがありますが、途中トイレはありません。

【半日コース】

① 旧打尾谷川
打尾谷川は急流であり、本流と合流する出口が曲っていたこともあって、豪雨のたびに氾濫していた。今は直線的な流路に改修されている。もとの河道は、小さな小川として残っている。

② 大歳神社

大歳の神は、正月にやつてきて、新しい年の平安と豊稔をもたらしてくれる。恵方から訪れるその風体はそのつど違い、しばしば汚い格好をしているという。
農村では、稲や収穫の神様として村ごとに祀ることが多い。この神社も鎮守の神様。

③ 湯元

岷山は、「九尺四方と六尺四方の浴槽が二ある。屋根はない。カヤで作った垣根で正面をふさぎ、後は石垣を高く築いている」と書いている。現在も、背後の石垣の下から湯が湧き出ている。当時の面影がしのばれる。
多田村検地帳(二六〇二)に「風呂屋敷」の名が見えるので、以前は湯殿があったのかも知れない。

④ 昇飛天馬観音

昔の道は少し川から離れた中腹にあった。馬で荷物を運搬する人が多く、安全を願って道沿いに観音様を祀っていた。車道が整備されたとき観音様も下に移動した。旅商人の一行が事故に合ったとき、観音様が翼の有る白馬の姿で現れ、皆を背中に乗せて空中を飛び窮地から救ったというインドの伝説にちなんでいる。
観音様に助けを求めた人はみな助かったというので、旅商人だけでなく多くの人々の信心をあつめていた。



⑤ とちのき此

「此」は「たお」と読み、峠を意味する方言。
このあたりは尾根が打尾谷川にせり出していて、山腹にあった昔の山道は小さな峠を越すかたちになつていった。
峠には大きなトチノキがあつて、通る人は、その下でひと休みしたという。

⑥ 風穴

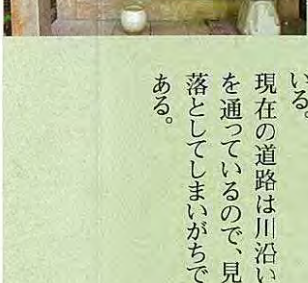
ジュラ紀(億六千万年前)の堆積岩で構成される湯来層中に石灰岩が挟まれていて、小規模な鍾乳洞がある。旧道沿いにある開口部からは、冬は暖かく夏は涼しい風が吹き出していて、旅人はここで休憩したという。
落人伝説の伝わる日室の里は、尾根の上にあつて、ここから上がっていく。

⑦ 天狗岩

岷山は「左手の山の中腹に独立した大岩があつて小松が生えている」と日記に書いている。
今は一部が見えるだけで、樹木に覆われて全貌はわからない。

⑧ 船岩

「船」は「船」の異字体。
岷山の描いた船岩は山道の右手に描かれている。船岩の先には石垣と人家があり、左下には打尾谷川が流れている。



⑨ 夜泣き観音

打尾谷八幡宮の川向にある。この観音さまにお参りすると、どんなに激しい夜泣きでもその晩からピタリと止まるといふ。
近所からはもちろん、遠方からもお参りする人が多かった。



【2時間コース】

湯来温泉街をゆっくり散策するコースです。
地元の人しか通らない裏道もあります。
きつと新しい発見がありますよ。

- ① 旧打尾谷川
- ② 大歳神社
- ③ 湯元
- ④ 昇飛天馬観音
- ⑤ 湯の神社



⑩ 湯の神社

岷山は、湯元のすぐ背後に温泉大明神社を描いている。これが湯の神社の前身だろう。
現在の主神、産土分掌司命(うぶすなわけもちむすび)の大神は、地中と暗闇、死後の世界を支配する。
国譲りの大国主、大己貴(おほなむち)の大神と、温泉や医療の神様、少彦名(すくなひこな)の大神も祀る。



湯来は「湯木」と呼ばれ、交通の要所でした。

打尾谷川を北に遡る道は、「山縣越え石州往還」と呼ばれ、廿日市と浜田をむすぶ最短ルートです。浜田は北前船の寄港地です。春には瀬戸内の塩、秋には北海道の昆布や数の子などを載せた馬が行き交ったことでしょう。また途中の山縣(北広島町)は鉄の生産が盛んで、厳島神社との関係も深いので、荷物も多かったと思われる。
南の廿日市までの道は、大森、十文字、七曲峠を通りますが、山越えの道もありました。檜原越え往還は、栗栖根から弥平谷に入り、柏木峠を越して平谷から玖島の檜原に出て、さらに泉水峠を越えて川末に出て、原から廿日市の平良(へら)に至ります。また大沢越え往還は、同じく柏木峠を越えて内野から大沢に出て、さらに大獄峠を越えて原です。
また東には、水内川を下って久日市(さかいち)で太田川を渡り、鈴張峠を越えて千代田に出ると、石見銀山や三次、出雲方面につながります。太田川に出たあと、坪野から津浪を通って加計に到達します。湯来から西に、水内川の本流を遡り、上多田から加下峽(東山溪谷)を通じて吉和に出て、さらに匹見を越すと、益田や津和野方面です。
また、本多田から虫所山を越すと、大竹・岩国方面への道があります。
このように湯来は交通の要所でした。
多くの旅人が温泉に入って旅の疲れを癒したに違いありません。

日室の里の落人伝説

平家の落人、高野彦左衛門は日室に住み大原山と猪股山で獅をし、早合山と猿山で薪をとって暮らしたといふ。
また、大切な水を飲ませた旅の坊さんの言うとおりの、梅の根元を掘ると水が湧き出したといふ。
今は廃村になつて道も荒れてしまつて通れない。

【古文書に見える温泉関係の地名】
多田村検地帳(二六〇二)には、
風呂屋敷 助右衛門
ふろの本 田 新左衛門
ふろの本 田 小三郎
ふろの本 田 九郎右衛門
ふろの本 田 八郎左衛門
ふろの本 内島 九郎右衛門
ふろの本 野島 二郎三郎
ふろの本 野島 左衛門太郎
ゆわろ 野島 二郎五郎
など風呂や湯のついた地名が見られる。
湯木 「木」は、大の下に丁と書いてある。